

# 家畜改良センター茨城牧場 飼養管理マニュアル

第2版

令和3年6月

# 飼養管理マニュアル 目次

## 1 子豚・育成豚の管理

(1) 子豚・育成豚の飼料給与と発育の目安 .....	1
(2) 飼養環境 .....	1
(3) 飼養管理のポイント .....	3
(4) 候補豚選抜のポイント .....	5

## 2 繁殖豚の管理

(1) 飼料給与 .....	9
(2) 飼育環境 .....	9
(3) 発情鑑定と交配 .....	12
(4) 妊娠鑑定 .....	12

## 3 分娩母豚の管理

(1) 分娩母豚の飼料給与 .....	14
(2) 飼育環境 .....	15
(3) 分娩時の管理 .....	15
(4) 離乳後の母豚管理 .....	17

## 4 哺乳豚の管理

(1) 初生豚への処置 .....	18
(2) 分割授乳の実施 .....	19
(3) 飼育環境 .....	19
(4) 虚弱哺乳豚の取扱い .....	19
(5) 里子の実施 .....	20
(6) 哺乳豚の飼料給与と発育の目安 .....	20

## 5 衛生管理

(1) ワクチンプログラム（生時～2次選抜前） .....	21
(2) ワクチンプログラム（2次選抜後） .....	22
(3) ワクチンプログラム（豚熱ワクチン） .....	22

# 1 子豚・育成豚の管理

## (1) 子豚・育成豚の飼料給与と発育の目安

「家畜改良センター茨城牧場給餌マニュアル（子豚・育成豚）」を参照。

## (2) 飼養環境

### ア 温湿度管理

#### (ア) 夏場

豚の様子（呼吸が荒い、餌食いが悪いなど）を確認しながら、風通しを良くする、豚舎の窓や扉（防鳥網付き）を開放するなどし、温湿度を調節する。

また、ファンやクーリングパットも適宜利用する。

#### (イ) 冬場

豚舎内の適正温度を保ちながら、窓を開閉する。

子豚豚舎は、ガスブルーダーと保温電球（コルツヒーター）を併用することもあることから、特に換気に注意する。

#### (ウ) 春、秋

昼夜の温度差が激しいため、豚舎内の適正温度を保ちつつ、離乳豚が暖や寝床を確保できるよう、豚房にコルツヒーターを下げる。

豚舎	舎内温度の目安	ファン稼働温度	保温	その他
子豚豚舎 (離乳豚舎)	24～28℃	28℃	ガスブルーダー (部屋全体の保温) コルツヒーター (豚房内の保温)	適宜、窓やドアを開けて換気。
選抜豚舎 (育成豚舎)	16～24℃		極寒期にはコルツヒーターを利用（若齢豚（60～70日齢）	暑熱期は、換気以外にクーリングパットや工業扇を利用。



## イ 群編成

1次選抜をする子豚豚舎では、闘争や競争等による発育不良等の発生防止の観点から、1豚房当たりの飼養頭数を12頭以下とする。

区分	一次選抜 (約50～60日齢)	検定開始～終了 (30～105kg時)	二次選抜 (検定終了時期、 約6か月齢)	交配 (約7～8か月 齢)
場候補豚	発育、体型、乳器・生殖器、肢蹄に優れるもの、遺伝的な欠陥(奇形、ヘルニア等)のないものを選抜。	検定開始～検定終了(30～105kg)後、体尺を行い、スキャナでロース断面積(EM)、背脂肪(BF)を測定。	選抜形質の育種価が上位のものから選抜。ただし、表型値や血統、乳器・生殖器、肢蹄も加味。	発情鑑定や精液検査を行い、交配可能なものを選抜。
配布候補豚	発育、体型、乳器・生殖器、肢蹄に問題のないもの、遺伝的な欠陥(奇形、ヘルニア等)のないものを選抜。	約3～7か月齢で配布		
調査豚	発育に問題のないものを選抜(♂は去勢)。	検定開始～検定終了(30～105kg) 体尺→枝肉売払(と畜)→肉質調査		
肥育素豚	上記に該当せず売払可能なものを選定(♂は去勢)。 →子豚廃用			

## ウ 事故防止

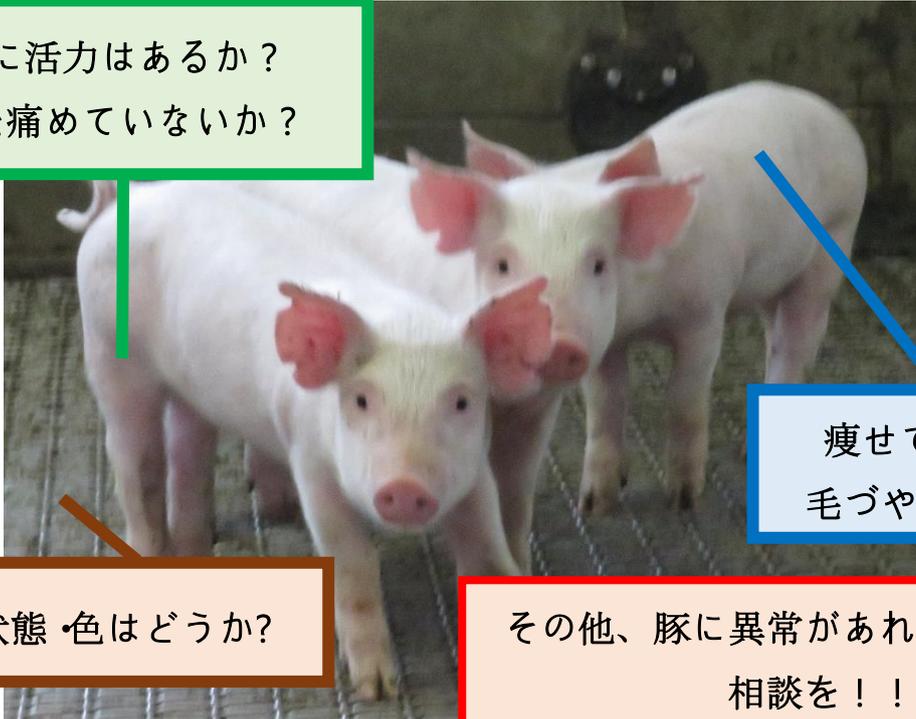
子豚、育成豚のストレスを軽減させるため、以下の対策を実施。

- ・尾かじりの防止(くさりの設置や、使い古した長靴等を豚房に入れることで遊ばせる。)
- ・下痢の防止(ゴムマットやコルツヒーターによる保温と寝床を確保する。)
- ・病畜豚等の早期発見と治療(肢蹄不良豚や調子の悪い豚等を早期に発見し、治療を施すとともに、隔離豚房で隔離飼育する。)
- ・保温豚房の設置(活力が低下した豚や発育不良豚等を集めて、保育豚房(保育園)を設ける。)
- ・飼養環境の確認と整備(発育ステージに応じ、換気、給餌、給水の状況を細かく確認し、常に飼養環境を整える。)

(3) 飼養管理のポイント

ア 豚の確認

豚に活力はあるか？  
足を痛めていないか？



痩せてないか？  
毛づやは良いか？

糞の状態・色はどうか？

その他、豚に異常があれば他の職員に  
相談を！！

イ 餌（飼槽）の確認

新鮮な飼料が適度に入っている



ハエが寄っている



端に寄ったエサ

掃除する

## ウ 給水器の確認

汚れがなく、水が押してしっかりと出る状態



ボロ出し時に  
水の出方の確認  
と掃除



黒くなった濁り



乾いている

#### (4) 候補豚選抜のポイント

1次選抜を50～60日齢で、2次選抜を検定終了時期（約6か月齢）に行い、交配に利用する種豚候補を選定する。

選抜は、発育、体型、乳器・生殖器、肢蹄の状況、遺伝的不良形質（尾曲がり、うき耳、ヘルニア等）の有無、改良形質の育種価の順位（2次選抜時）、親の血統を考慮して行う。

特にヘルニア（陰囊ヘルニア、臍ヘルニア等）、陰睾が発生したら、原則その腹から場候補と配布候補は選抜しない。

また、繁殖・分娩期の事故を防止するため、乳器や肢蹄については、以下の点に気を付けて確認する。

##### ア 乳器のポイント

乳頭数について、特に雌系品種の大ヨークシャー種とランドレース種は、左右それぞれ7個以上とし、左右の差が2以上あるものは選抜しない。

選抜してよい  
乳頭の例（鮮明）



選抜してはいけない  
乳頭の例  
（不鮮明、盲乳など）



## イ 肢蹄のポイント

以下の肢蹄は、極力選抜しない。

前屈	外向き	クロス状	踏込が深い	爪不揃い
 Buckled (前屈)	 Standing outwards (外向きに 起立)	 X-shaped (X形状)	 Standing under (内側に起立)	 Uneven (不揃い)

また、爪の大きさ・形状等にも注意して選抜する。

尾野寺崇・當眞嗣平・西條由紀・佐藤正寛：豚における肢蹄の評価法と  
遺伝的パラメーターの推定（日豚会誌, 46, 33-59, 2009）より引用

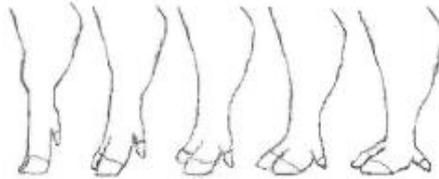
つなぎについては、豚の「つなぎ」評価調査表を用いて、“3”になるよう選抜する。

豚の「つなぎ」評価調査表 登録名 \_\_\_\_\_  
No. \_\_\_\_\_

品種 \_\_\_\_\_ 性 \_\_\_\_\_ 子豚登記又は  
種豚登録番号 \_\_\_\_\_ 農場での名称 \_\_\_\_\_ 生年月日 \_\_\_\_\_

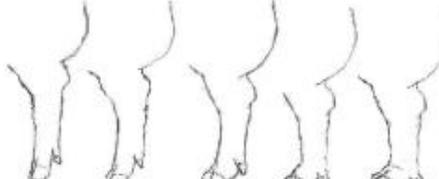
30kg時評価調査員氏名 \_\_\_\_\_  
105kg時評価調査員氏名 \_\_\_\_\_  
離乳時評価調査員氏名 \_\_\_\_\_

**前肢**



体重(30kg)	検査月日	管囲	1	2	3	4	5
実測:		cm	コメント:				
体重(105kg)	検査月日	管囲	1	2	3	4	5
実測:		cm	コメント:				
離乳時	検査月日		1	2	3	4	5
			コメント: (のこす・トータ)				

**後肢**

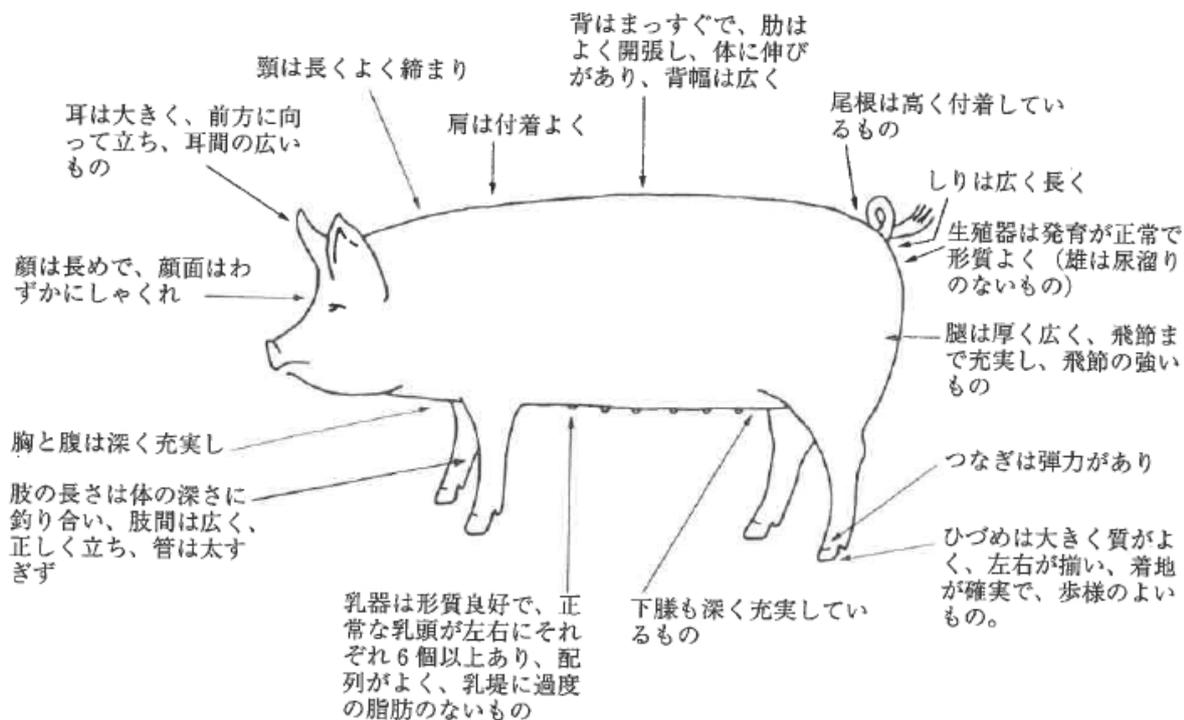


体重(30kg)	検査月日	管囲	1	2	3	4	5
実測:		cm	コメント:				
体重(105kg)	検査月日	管囲	1	2	3	4	5
実測:		cm	コメント:				
離乳時	検査月日		1	2	3	4	5
			コメント: (のこす・トータ)				

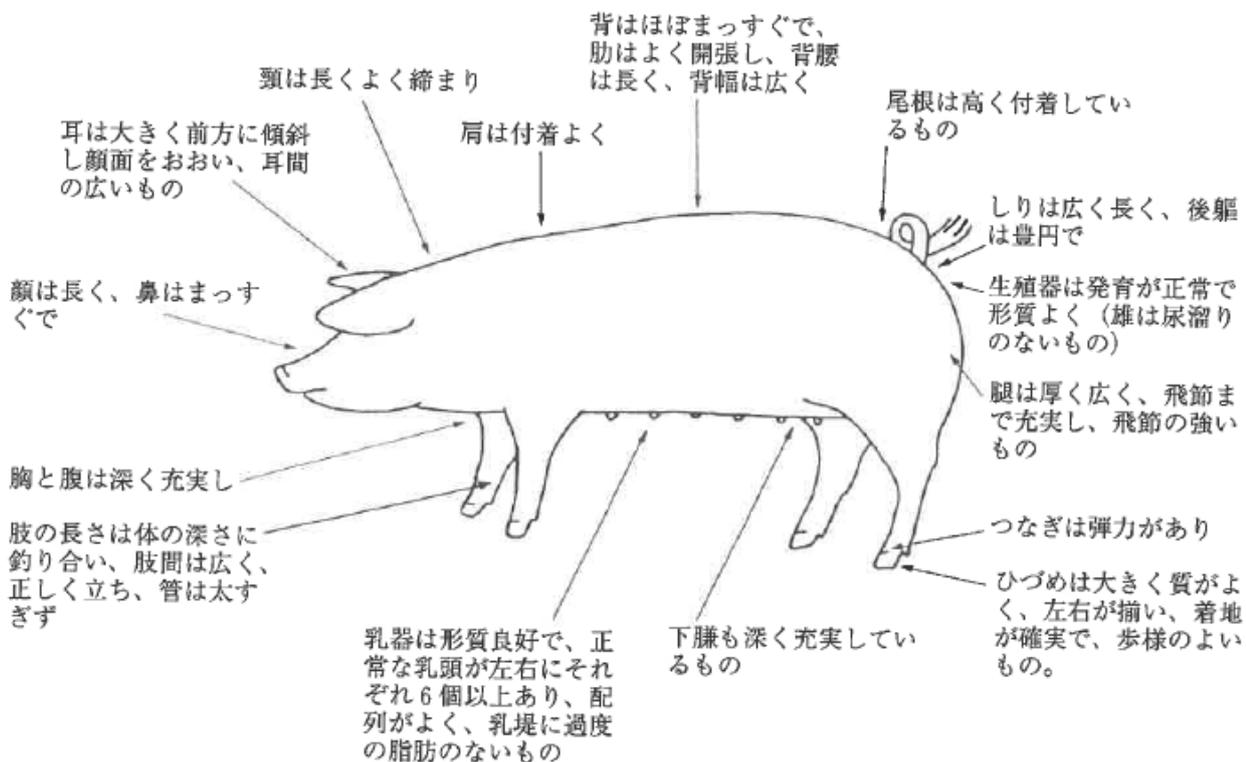
## ウ 体型のポイント

各品種の望ましい体型の特徴は、以下のとおり。

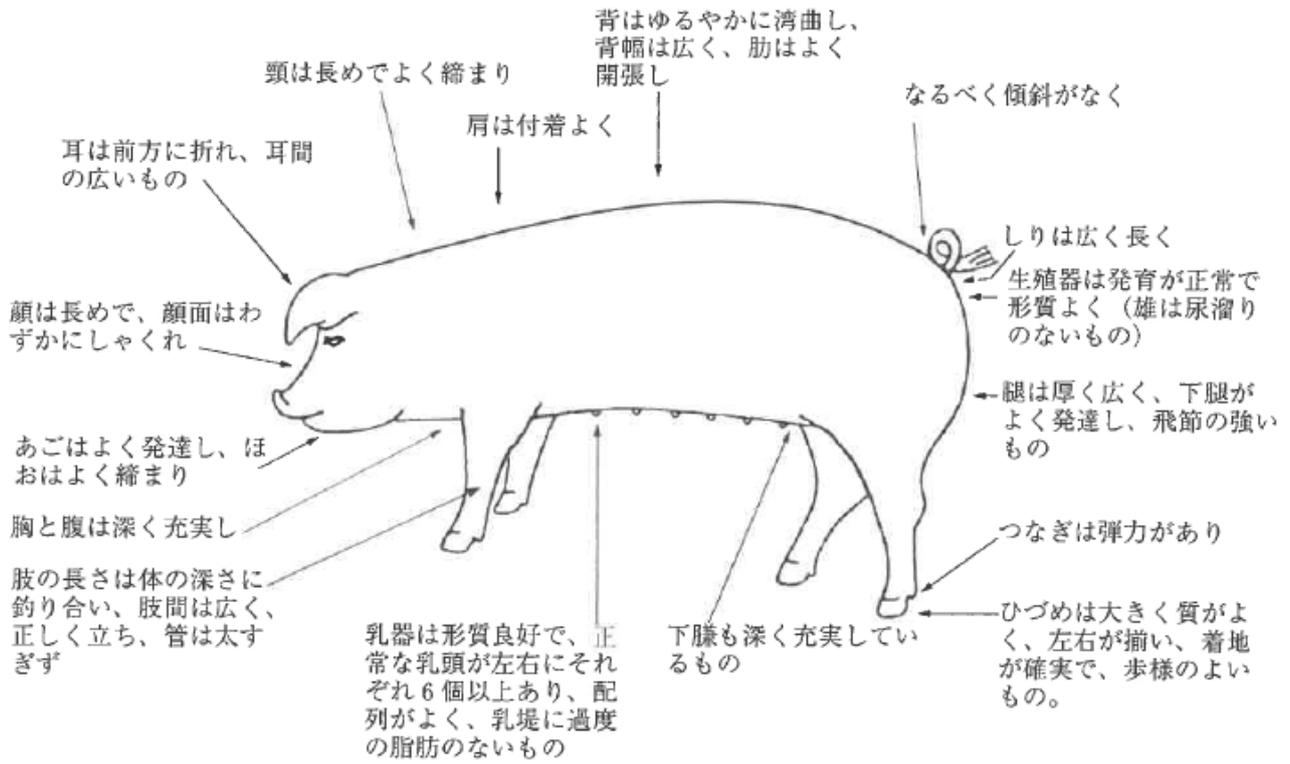
### 大ヨークシャー種の特徴



### ランドレース種の特徴



# デュロック種の特徴



種豚登録審査基準より

## 2 繁殖豚の管理

### (1) 飼料給与

「家畜改良センター茨城牧場給餌マニュアル（種雄豚）」と「同給餌マニュアル（種雌豚）」を参照。

### (2) 飼育環境

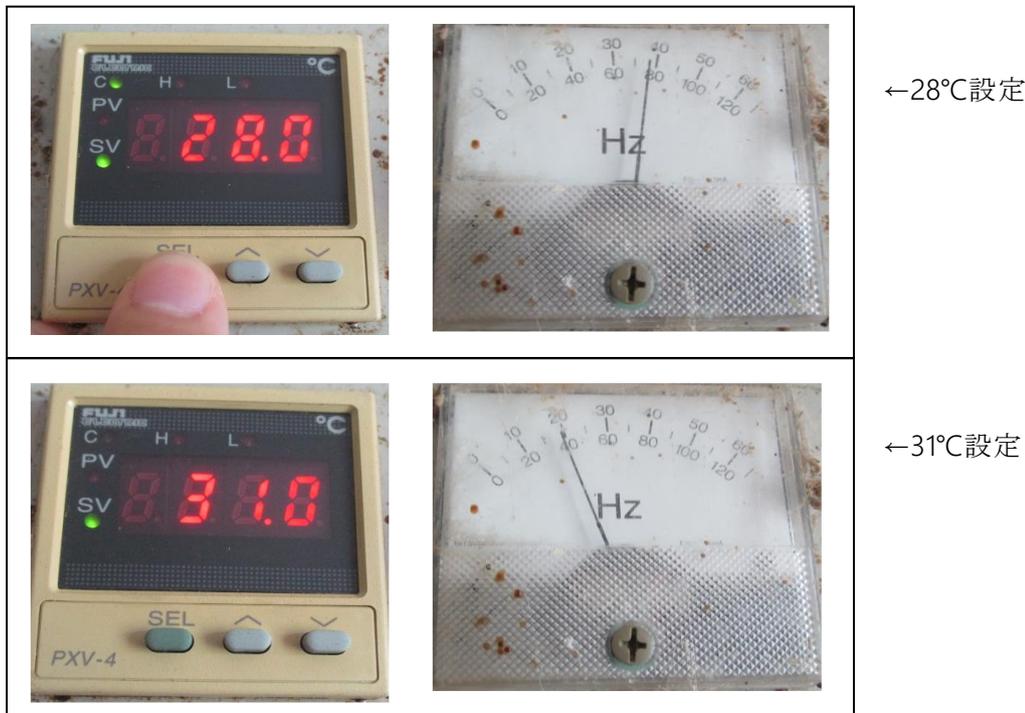
#### ア 温度管理

豚の許容温度は、ステージごとに異なるが、育成→交配→妊娠のステージにかけては、おおむね 10～27℃であることから、真夏日でも 30℃以下になるよう心がける。

#### (ア) 雄雌豚舎



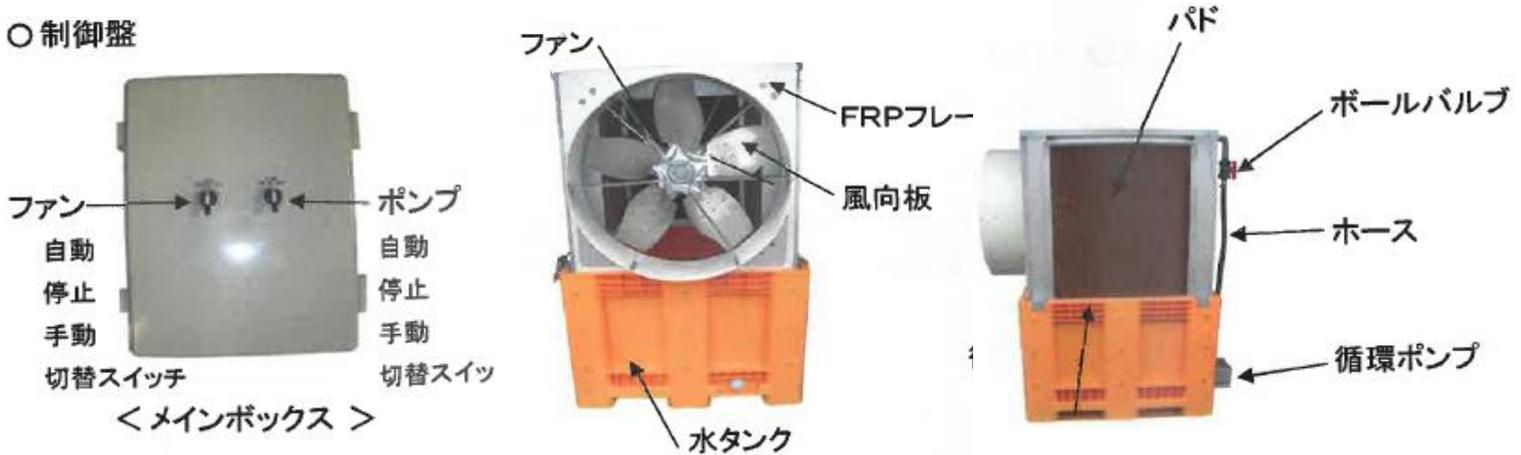
サイクルインバーターとピットファンインバーターで豚舎内の温度をコントロールする。



- ・環境温度が設定温度以上になると、周波数が上昇し、インバーターの回転数が上がる。
- ・真夏日の環境温度を考慮し、通常 28℃に設定する。

### (イ)種雌豚舎

#### ○制御盤



エコクーラー<EC-1>で豚舎内の温度をコントロールする。  
 メインボックスのスイッチを「自動」にしておくことで、環境温度に応じ、ファンとポンプのスイッチのONとOFFが切り替わる。

#### ・ファンの温度設定方法



ファンのスイッチが切れる温度  
 (28℃未満でOFF)

1プッシュ目



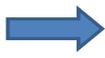
ファンのスイッチが入る温度  
 (スタート偏差2℃なので、30℃でON)

2プッシュ目



ポンプのスイッチが切れる温度  
 (28℃未満でOFF)

3プッシュ目



ポンプのスイッチが入る温度  
 (スタート偏差2℃なので、30℃でON)

4プッシュ目

注意: 夏場はバルブを開け、冬場は閉める。  
 バルブ操作時にはタンク内の点検をする。

### (ウ)5分豚舎

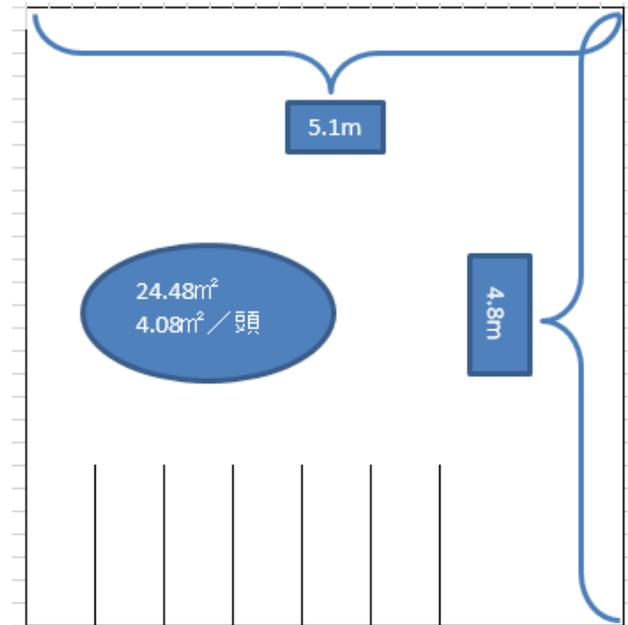


他豚舎と違い、環境温度をコントロールする機器がないため、夏期は、全ての窓とドアを開放し、防鳥ネットを張り、工業用扇風機を設置する。

### イ 飼育豚房

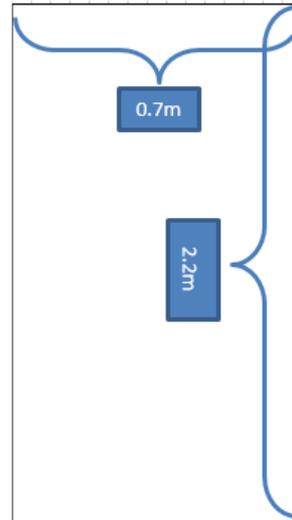
「アニマルウェルフェアの考え方に対応した豚の飼養管理指針」(畜産技術協会、令和2年3月。以下、飼養管理指針という。)に基づき、以下の豚房で飼養管理を行う。

### (ア)群飼(雄雌豚舎、雌)



- ・ 豚房内は6頭飼いとする。
- ・ 飼養スペースについては、飼養管理指針では、生体重 200kgの雌豚1頭当たり 1.15 m<sup>2</sup>以上としているが、これを上回る 4.08 m<sup>2</sup>ある。

(イ) ストール(種雌豚舎、雌)



- ・ 豚房内は1頭飼いとする。
- ・ 飼養スペースについては、飼養管理指針で 60cm(幅) × 180cm(奥行き)以上の広さを確保することとされているが、これを上回る。

(ウ) 種雄豚房(雄雌豚舎、種雌豚舎、5分豚舎)

闘争防止のため、単飼とする。

(3) 発情鑑定と交配

「家畜改良センター茨城牧場繁殖管理マニュアル」を参照。

(4) 妊娠鑑定

ア 使用機器

妊娠鑑定には超音波画像診断装置を用いる。

## イ 使用方法

(ア)プローブ(探触子)にゲルを塗る。

(イ)後肢付け根の5～8cm前方(5・6 乳頭付近)、乳頭の線と後わき腹の垂れ下がった皮膚との間に、前上向き45°(反対側の最後肋骨方向)にプローブを当てる。

(ウ)超音波画像を観察しながら、プローブを徐々に下腹部前方に移動させる。

## ウ 見える画像



←交配から23日後の画像

- ・ 胎嚢内の胎水が時間経過とともに増加することで、子宮内腔が拡張し、交配から23日以降であれば、上画像のような黒い空洞として確認できる。
- ・ 交配から25～30日経過すると、子宮内に胚や胎膜を観察できるようになる。
- ・ 交配から25～30日は、胎嚢がある程度大きくなり鑑定しやすいが、30日を超えてしまうと、表示できる大きさを超えてしまい、正確な鑑定ができなくなる可能性があるので注意する。

### 3 分娩母豚の管理

#### (1) 分娩母豚の飼料給与

- ・分娩前のBCSは、3.5が理想。
- ・分娩前の母豚は、1日2.2kgの飼料を給餌する。  
※季節や品種、BCSによって2.0kg~2.5kgで調整する（特にBCS4以上の母豚は、給餌量を2.0kgにしぼる。）。
- ・授乳期の母豚は、母豚給餌マニュアルに沿って給餌する。

#### ア 分娩前の管理

- ・移動後は、環境の変化から食下量が低下しやすいので、数日間注意して観察する。
- ・分娩前は、便秘になりやすいため、十分な飲水量が確保できているかウォーターカップの流量を確認するとともに、1日1~2回ホースで給水する。
- ・分娩前の便秘対策として、餌に生菌剤を1~2g混合する。

#### イ 初産豚授乳期の管理

食下量が少ないので、痩せすぎない（BCS2以下）ように注意する。

##### 〈ポイント〉

- ・母豚が上限頭数(※)以上の子豚を産んだ場合、子豚を里子/分離哺育に出す。  
※W：11頭まで L：12頭まで
- ・飼料は、1日2回以上に分けて新鮮なものを給与する。
- ・給餌の際、自力で立ち上がらない母豚を立たせる（授乳中を除く）。
- ・水が飲めているかよく確認する。
- ・分娩後1日が過ぎても立って餌を食べない豚には、ビタミン剤を10ml投与する。

#### ウ 経産豚授乳期の管理（Y・Mのみ）

食下量が多い品種ではないので、古い餌が残らないように気をつける。

## (2) 飼育環境

1年を通し、窓の開閉や送風機器・暖房機器の利用により、1日の気温差が大きくなるように調整する。

### ア 温湿度

母豚許容温度：13～27℃

(ア) 夏期：高温多湿になるため、風を動かして体感温度を下げる。

- ・入気・排気ファンの稼働。
- ・分娩前後で特に呼吸が速くなっている母豚については、個別に工業扇を稼働させる。

ただし、直接体に風を当てないように注意する。

- ・その他、ドリップクーリングなどの対策を実施する。

(イ) 冬期：低湿度に注意する。

適度な換気と消毒で湿度が低くなりすぎないようにする。

### イ 消毒

1日2回、午前と午後の業務終了時に豚舎通路に、以下の消毒薬を噴霧する。

アストップ 500倍希釈（1Lの水に2mlのアストップを加える。）

## (3) 分娩時の管理

### ア 分娩兆候

〈食欲がない〉 〈落ち着きがない〉 〈射乳している〉 という兆候が見られたときは、日中も分娩用のコルツヒーターを消さず、こまめに様子を見る。

### イ 分娩遅延への対応

以下の場合、プロスタグランジンF<sub>2</sub>α類縁体制剤（ゼノアジン）を2ml投与し、分娩誘起させる。

D種：分娩予定日初日の夕方に分娩兆候が見られないとき。

D種以外：分娩最終予定日の2日後の朝に分娩していないとき。

## ウ 分娩後の子宮洗浄

全頭で実施する（分娩当日か翌日に行う）。

① 母豚を立たせ、陰部を消毒する。	
② A I と同じ要領で A I カテーテルを入れる。	
③ イソジン液 70ml を注入する。	

## エ 難産の対応

〈用意するもの〉

- a. 産道拡張剤（ホーリン） b. 直腸検査用手袋 c. 産道粘滑剤（プロサポ）  
d. 消毒用エタノール e. 子宮収縮剤（アトニン）

① 産道拡張剤を注射する。	
② 産道粘滑剤を 35～38℃のお湯で溶かす。	
③ 母豚の陰部の汚れを拭き取り、消毒する。	
④ 直腸検査用手袋をつけ、産道粘滑剤を十分につけてから、外陰部からゆっくりと手を入れていく。 ※助産は手の細い人から順に行う。 ※母豚の体位は、側臥位にすること。左側が下なら左手を、右側が下なら右手を挿入する。	
⑤ 胎児を確認する。確認できない場合、15 分程度時間をおいて再度手を挿入する。 ※子宮頸管が広がっている場合、子宮収縮剤を投与する。	
⑥ 胎児の状態を確認する。胎児の背が母豚の背側になるよう胎児の体位を整える。足などが引っかかっている場合、無理に引き出さず、一度戻して胎児の体位を整える。	
⑦ 頭位の場合、頭頂を掌で覆うように頭部をつかむ。手が入らない場合、下あごをつまむように持つ。尾位の場合、足根関節をつかむ。	
⑧ 母豚のいきみに合わせて、ゆっくりと胎児を引き出す。	
⑨ 30 分程度様子を見て、次の胎児や胎盤が娩出されるか確認する。	
⑩ 娩出が続かないようであれば、もう一度手を入れる。	

参考：系統豚「ボウソウ L4」飼養管理マニュアル

#### (4) 離乳後の母豚管理

- ・ 離乳当日（子豚を移動する日）から維持飼料（2.0kg）を給与する。
- ・ 離乳後も泌乳が続く（したたる）母豚についても、給与量は2.0kgとする。
- ・ 痩せている個体については、BCS3になるように調整する（Y・Mのみ）。

## 4 哺乳豚の管理

### (1) 初生豚への処置

#### ア 保温

体温低下を防ぐため、乾燥剤をまぶして体を乾かす。



#### イ 初乳

生まれた子豚にまんべんなく初乳を飲ませるため、分割授乳を行う（後述）。

#### ウ 切歯

- ・子豚の第3切歯と犬歯（上下左右の合計8本）を切除する。
- ・舌や歯肉を傷つけないよう、歯の先端側1/3（出血しない深さ）を歯肉に並行に切る。
- ・ニッパーは、使用ごとに消毒（ヒビテン）し、切れ味が落ちたら交換する。

#### エ 鉄剤

貧血予防のため、鉄剤を投与する。



#### オ 臍帯の処理

- ・乾燥した臍帯は、自然脱落を待つか、ニッパーで短く切る。
- ・濡れた臍帯は、基本切らない（切る場合、指で血管を潰すように切り、切断面を消毒する。）。
- ・臍帯に乾燥剤をまぶし、乾燥を促進する。

#### カ 生殖器確認

- ・乳頭数を数える。
- ・陰部に異常がないか確認する。



耳刻

#### キ 体重測定

#### ク 個体識別

- ・耳刻を行う。
- ・感染防止のため、耳刻後は切断面を消毒する。



消毒

## (2) 分割授乳の実施

小さな子豚が、分娩後、十分な初乳を飲むことができるよう、分割授乳を行う。

① 分娩当日親が餌を食べた後、大きい子豚から順に生まれた半分の子豚を保温箱に閉じ込める。	
② 閉じ込めた子豚には代用乳を与える。	
③ 1時間程度小さい子豚に授乳させたら、閉じ込めていた大きな子豚を開放する。	
④ 分娩後 24 時間以内に 2 回実施する。	

## (3) 飼育環境

1年を通し、窓の開閉や送風機器・暖房機器の利用により、1日の気温差が大きくなるように調整する。特に夜間の腹冷えによる下痢の発生に注意する。

### 子豚の適温

子豚のステージ	許容域	相対湿度
新生子豚	32～38℃	60%
哺乳子豚 (2～5 kg)	27～32℃	
離乳子豚 (5～20 kg)	24～30℃	

※保温箱内は 30～35℃を保つ。

参考文献：チクサン出版社  
月刊養豚界 臨時増刊号  
豚の生理と生産性

- ア 夏期：送風による体の冷えに注意する。
  - ・ コルツヒーターの強弱・高さを調整する。
- イ 春期・秋期：気温差に注意した管理を行う。
  - ・ 気温に合わせて保温設備を稼働する。
  - ・ 上手に窓の開閉を調整する。
- ウ 冬期：最低室温が 15℃以上になるようにする。
  - ・ 特に娩出直後の体温低下に注意する。
  - ・ ガス機器を使用し、室温が低くなりすぎないようにする。
  - ・ 保温箱内で子豚が寝るよう、教育と温度調整をこまめに行う。



適温時の寝姿



寒い時の寝姿

## (4) 虚弱哺乳豚の取扱い

低体温で動きの悪い哺乳豚について、虚弱哺乳豚の取扱いマニュアルに準じて対応する。

## (5) 里子の実施

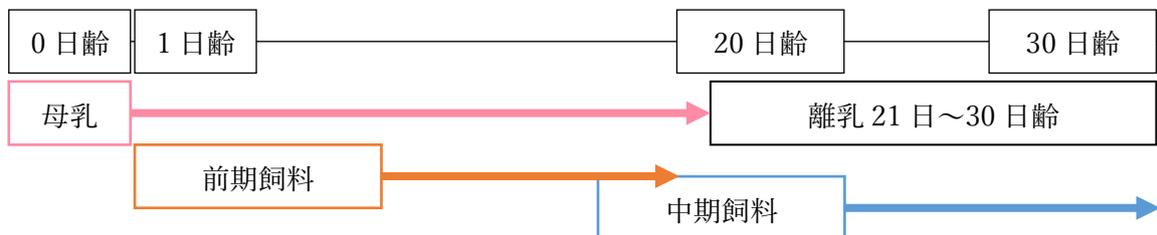
里子は、1日齢～3日齢で行う（※初乳を与えるため、分娩日当日は行わない。）。

① 分娩から 24 時間は、母豚につけて初乳を飲ませる。	
② 体が大きく、元気なものを里子とする。	
③ 分娩日の差が 3 日以内で性質が穏やかな母豚を里親とする。 (子豚の大きさが里子と同程度のものが良い。)	
④ ③の里親の子を保温箱に閉じ込め、②の里子を混ぜる。しばらく置いてから保温箱を開放する。	
⑤ 母豚が里子を攻撃することがないか、しばらく様子を確認する。	

## (6) 哺乳豚の飼料給与と発育の目安

### ア 子豚の飼料給与

- ・ 3 日齢で餌付けを行う。
- ・ 分娩～19 日齢までは前期飼料を、20 日齢以降は中期飼料を給与する。  
※母豚の泌乳が悪い場合、最大 13 日齢まで代用乳を給与する。  
※餌の切替えは 2 日程度、新旧の餌を混合し新しい餌に慣らす。



### イ 離乳時期

- ・ 21 日齢～30 日齢で離乳させる。
- ・ 離乳以降は特に十分に水が飲めているか注意する。
- ・ 離乳後は下痢に注意し、糞や豚をよく観察して早期発見・早期治療を行う。

<p>発育の目安 (目標)</p> <p>(Y・M 除く)</p> <p>生時 : 1.3kg</p>
---

## 5 衛生管理

発育ステージごとのワクチンプログラムは、以下のとおり。

### (1) 生時～2次選抜前

種類	商品名	生/不活化	接種部位	使用注射針	接種対象豚	接種時期
鉄剤	トンキー200	-	大腿部注射	21G (5/8)	生存産子全頭 (当日とう汰予定の豚を除く。)	生時
豚丹毒不活化ワクチン	日生研豚丹毒不活化ワクチン	不活化	大腿部注射	21G (5/8)	30日時点で生きている産子全頭 (当日とう汰予定の豚を除く。)	生後30日前後
			頸部筋肉内注射	20G (1と1/2) 又は 22G (1)	全頭接種 (とう汰予定の豚を除く。)	一次選抜 (50日以降) の翌日
			頸部筋肉内注射	20G (1と1/2)	場候補豚と配布候補豚	年2回 (6月及び12月)
豚アクチノバシラス・ブルニューモニエ感染症・マイコプラズマ・ハイオニューモニエ感染症混合不活化ワクチン	日生研豚APM不活化ワクチン	不活化	頸部筋肉内注射	20G (1と1/2)	場候補豚・配布候補豚・枝肉調査豚・場内肥育豚・離乳母豚	一次選抜の2週後とその3～4週間後 離乳母豚は公告時 (候補全頭) と落札時 (配布豚のみ)
ヘモフィルス・パラスイス感染症不活化ワクチン	日生研グレーサー病2価ワクチン	不活化	頸部筋肉内注射	20G (1と1/2)		

接種例



## (2) 2次選抜後～

種類	商品名	生/不活化	接種部位	使用注射針	接種対象豚	接種時期
豚バルボ不活化ワクチン	"京都微研"豚バルボワクチン・K	不活化	頸部筋肉内注射	20G (1と1/2)	場候補・配布候補豚	【初回】2次選抜後(約6か月)及びその2～4週間後  【初回接種後♂】年3回(5、9、1月) 【初回接種後♀】種付け4～1週間前。離乳後すぐに種付けを行わない場合、前回接種から6か月を超えない範囲  【配布候補豚*】公告時(候補全頭)**と落札時(配布豚のみ) * 離乳母豚については(分娩前に2回接種しているため)、落札時に追加として1回のみ接種 ** 状況に応じて公告前又は後に接種
日本脳炎不活化ワクチン	"京都微研"日本脳炎ワクチン・K	不活化	頸部筋肉内注射	20G (1と1/2)		
豚大腸菌性下痢症不活化・クロストリジウムパーフリンゲンストキソイド混合ワクチン	リターガードLTC	不活化	頸部筋肉内注射	20G (1と1/2)	妊娠豚	分娩6週間前と3週間前の2回
PED	日生研PED生ワクチン	生	頸部筋肉内注射	20G (1と1/2)		分娩10～8週間前と2週間前の2回

接種例



## (3) 豚熱ワクチン

種類	商品名	生/不活化	接種部位	使用注射針	接種対象豚	接種時期
豚熱ワクチン	スワイバックC*	生	頸部筋肉内注射	①子豚：22G (1) ②その他：20G (1と1/2)	①子豚：全頭 ②その他：半年後に2回目、その後1年ごとに追加接種	子豚については、家畜保健衛生所の指示による** (当面は50日齢以降)

\* ワクチン(商品名)は、家保から提供されるものを使用する。

\*\* 添付文書では、1～2か月齢時に接種となっているが、当面は50日齢以降に接種する。

(以上)